

2023年11月17日（金） 吉川洋氏研究会

「マクロ経済学の再構築—ケインズとシュンペーター」 I

* ここでは、吉川洋氏の研究会1における講演録をまず載せ、その後で、当日配付した関連資料の説明を入れる。これら資料は、読んで頂ければ判るように、今回の山口大学経済学部における教育講演会・研究会の内容に沿っているものである。

そして研究会Iのメインであったといえる山口大学経済学部准教授の加藤真也氏の講演録は、ご本人の希望により、研究ノートに切り替えて、加藤氏の講演録自体は掲載しないこととする。なお吉川洋氏の講演録における小見出しは、マスコミ記事等でよくみられるように、司会進行（浜島）が適当に付けたものである。

司会進行

本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。それでは、只今から吉川洋先生の研究会「マクロ経済学の再構築—ケインズとシュンペーター」ということで、お話をさせていただきます。TAの方、何かあったらTAの方にいっていただけたらと思います。それでは吉川先生、よろしくお願いします。

吉川洋氏

吉川でございます。座ってやらせて頂きます。こうした機会を頂きまして誠にありがとうございます。90分ぐらい全体で時間があるということですが、私の方で30分ぐらい問題提起、考えていることを述べさせて頂いて、加藤先生にフォローして頂いて、全体で議論させて頂くという流れと理解しております。

自己紹介と経済学の変容

私は経済学者で専門がマクロ経済学です。本日まで参加されている皆さん方には経営学の先生もいらっしゃるのでしょうか。あるいは、経済学プロ

パーではない先生もいらっしゃるのかもしれませんが、今日の私の話は、少し風呂敷を広げさせて頂いて、そもそも問題意識はどういうことなのかというところで、簡単に自己紹介させていただきます。私は1970年に東大に入ったんですけども、ちょうど紛争で東大の入試がなかった翌年なのですが、私のジェネレーションで経済学を志した人たちの中にはかなりの人たちがマルクス経済学に興味を持っていてですね、高校時代に経済学を志したというそういう人間が多かった。私も例外ではないんですけど、それはやはり時代の流れだったと思いますね。

当時学生運動ですと全共闘がありますし、60年安保とは規模が違うのですが、70年安保改定というのがあったりとかですね、とにかく時代の大きな流れがあった。68年はパリの五月革命ですか、それからアメリカでもベトナム戦争との関係で、学園紛争がアメリカ中の大学で燃え盛っていたという時代。そうした時代の流れもあって、マルクス主義の考えがご存じの通り大きな影響力を持った。経済というのは「下部構造」であり、すべてのことは、芸術まで含めて下部構造に規定される

という事だった。したがって世の中の動きをしっかり理解するためには、経済を理解しなければならないとこういった大きな流れがあったわけです。

それとまたマルクス主義の中でいろいろな考え方があって、東大では、マルクス経済学をご存じの方はご存じでしょうが、“宇野経”という宇野弘蔵先生という立派なマルクス経済学の先生がいらっしゃって、宇野先生の経済学だと“マル経”ですが、決して理論で資本主義社会が革命によって変わるといようなことは証明できるような話ではないというのが彼の言うところの原理論だったのです。とはいえもう一方でマルクス主義の考えによれば我々の住んでいる資本主義経済というのは早晩に行き詰っていく、深刻な不況、恐慌に至って、そこでやがて社会主義社会に代わるといこういった話だったのです。そこで我々高校生はですね、「であればやはりそういうメカニズムを理解したい」とこういふうに若いながらに思ったわけですね、こうして経済学を志したと。こういうようなことであったわけです。

私の場合は、それからケインズというようになってですね、以来マクロ経済学を勉強してきたわけですが、このマクロ経済学というのはちょうど私のキャリアと重なる形で大転換した。一言で言うと、ケインズ経済学が変わってしまった、というよりはマクロ経済学が変わってしまった。我々が学生の頃は世界的には当時の言葉でいう近代経済学の国際的な大御所的な先生、ポール・サミュエルソン、もちろん先生方お名前をご存じでしょうが、サミュエルソンが「新古典派総合」という言い方をして、「経済学はミクロとマクロの二刀流だ」、こういふことで、ミクロは新古典派の価格理論、マクロはケインズ経済学と、こういふある種の常識論で世界中の経済学者もそれで納

得して、そういう風に教科書も書かれて、大学の授業も編成されていた。

確かに今でも多くの大学では、山口大学もそうかもしれませんが、ミクロ経済学とかマクロ経済学という形になっているかもしれませんが、学問の研究の世界では、マクロ経済学というのは完全に新古典派に吸収されたんですね、ここ30年ぐらいで。それが私にとってはまったく納得がいかなかったことです。非常に理不尽なことだと思って、この50年ぐらい、一体どういうことなのかということを模索してきた、ということです。が、今日の話に通底する話なのですが、そういうことを自分の中で考える中でですね、つくづく経済学というのは、自然科学と違って、やはり時代の流れを反映する学問だという風に考えるようになりました。

経済学におけるシカゴ学派の勝利とアメリカの経済社会

経済学の出発点はいろいろな言い方があるかと思いますが。経済に関する様々な考えを紐解くという事で言えば、西洋ではアリストテレスまで遡ることができるでしょうし、東洋の方ではご存じの通り中国という事になるのですが、儒教のいわゆる聖典というんですかね、論語にはほとんど経済学では出てこないというか、経済のことを語るのは汚らわしい、利について語ることは小人がやることだと、悪口が出てくるほどで、経済に関して極めて冷たいというか、汚らわしいから君子は語るべからずというレベルのことが書かれている感じがしますが、孟子になると全然違うんです。孟子になると、極めて後世の経世済民に関することが書かれていて、以降、儒教の伝統の中で経世済民というのが出てきます。江戸時代の儒者というのは今の言葉でいうエコノミストと言われるよう

なものになるようです。儒教はご存じの通り君子は怪力乱神を語らずということで、形而上のことは語らずに現世がすべてだということですから、その現世のなかで結局は経済というのが大事だということになる。

ただ、東洋西洋ルーツは違うと思いますが、どこか出発点を探すとすれば常識的に、例えばスミス辺りから語るとすると、18世紀ということになります。古典派の経済学はご存じの通り、資本主義勃興期のイギリスを反映している。マルクスの経済学もリカードから派生したわけですけど、マルクス自身、イギリスの経済をみていたということだと思います。

そういう流れで今日これからお話しますが、私の学問的なキャリアと重なるような、つまり1970年くらいから今日に至るまでの経済学というのは、やはり現代のアメリカの経済社会の影響を極めて強く受けていると考えます。経済学はおかしくなっている、これが私の考えですが、それは私の専門であるマクロ経済学の世界では、ケインズ経済学がフィニッシュして新古典派に吸収される時に力があつたのはご存じの通りミルトン・フリードマン、ロバート・ルーカス、いわゆるシカゴの人たち、シカゴの経済学が結局は勝つたということになる。

それでなぜシカゴの経済学が勝つたのかということになるんですが、それはフリードマン、ルーカスが極めてアグレッシブで、雄弁であったという事もあるかと思いますが、確かにそれもあつたに違いないと思いますが、彼らの雄弁さだけでこういうことが起きたとは考えられない。やはりアメリカの経済社会が彼らを求めていたのだ、そういう風に考えるようになりました。それで、非常に乱暴な表現で私流に言わんとすることをお伝えするとすれば、経済学は輝きを失ってきているとい

うふうに思われるのですが、それはアメリカの経済社会が輝きを失ってきたことを反映している、そのように考えられます。

ちなみにケインズ経済学、ケインズはイギリスの経済学者ですが、第2次世界大戦の始まる前から熱狂的に若い世代のアメリカの経済学者に受け入れられたわけですね。これはサミュエルソンが有名なメモワールを残しているわけですが一ハーバードの大学院の黄金時代で、サミュエルソン、トービン、ソロー、マスグレイヴ、その他もろもろの人たちが大学院に当時いたわけですが一、1936年にケインズの一般理論が刊行されて、それが直ちにアメリカに本が輸入されてきたとき、ある一定の年齢以上の経済学者たちはこの本に対して免疫を持っていたと。それは太平洋の小さな島にやってきた伝染病と同じで、不思議なことに年齢によって免疫が違って、ある年齢以上の経済学者はケインズの「一般理論」にそっぽを向いた。しかし若い世代はあつという間に伝染病に感染してしまった。こういうメモワールを残しているのですが、若い世代のアメリカの経済学者は「一般理論」に飛びついたんですね。

ケインズの経済学というマクロの経済政策では国の役割、中央銀行も政府に準ずると考えれば、やはり財政金融政策というのはパブリックセクターが非常に大きな役割を果たすべきだ、こういう考えで、これはもちろんシカゴ的な考え方とは完全に反対の考え方です。ちなみにシカゴの考え方とは日本でやや不正確に「市場原理主義」と呼ばれるもので、まさにそういうものだと思っています。

しかし、その程度というのは必ずしも日本で理解されているわけではないと私は感じます。つまり、シカゴの人たちはどういうことを言っているのかということももちろん社会保障はいらぬ、一切

ない方がよい。公的な年金もいらない。公的な医療保険制度もいらない。いらないものはなくすべきだと。普通の日本人だとびっくりされる方が多いんじゃないですかね。でも彼らの発想を理解するためにはですね、もし誰かが寒い冬、コートが無かったら寒い。必需品、コートがない人は気の毒だろうと。寒い冬を越すためにどうしても必要なオーバーコートを全員に1枚ずつ国が給付するといったら賛成しますかといったら、おそらく大部分の日本人はそれは極端だと考える、こういうことだと思います。

なぜだと思いますか？必需品であるにもかかわらず、なぜ政府が1枚のオーバーコートを全国民に支給するといったら反対するのだろうか。それはやっぱりオーバーコートというものは必需品だけど、それにはデザインもあるし、色々な趣味もあるし、そこでフリードマンの決め台詞である“Free to Choose”, 「選択の自由」ということがやはり大きなポイントであって、誰も人民服を一枚ずつ配るという事には賛成しない。実はアメリカのシカゴの人たちというのはほとんどのパブリックなサービスというのを今私が例えた人民服と同じレベルで捉えているんです。したがって、公的な年金はなし、医療保障もなし、フリードマンは公的な・公立の小学校もやめるべきだ、すべてを私立にするべきだと言っていました。

フリードマンは言っていませんでしたが、フリードマンの 腰巾着みたいな、若いプロフェッサーは警察もプライバタイズ（民営化）するべきだと。警察をプライバタイズするとはどういうことだと思われるかもしれませんが、要するにセコムみたいなサービスがあるでしょうと。もしセキュリティを極限まで確保したいのだったら自分のお金でガードマンを雇って自分の横に立てればいいと。ハンバーグを食べるかセキュリティ

にするのかというのは全員が自分の財布とそれぞれの価格を指標として、効用が最大になるように、つまり限界的なところで、セキュリティの限界効用とハンバーグを食べると時の限界効用が一致するところまで、それが価格比になるように最適化を図って決める、それが正しいやり方だと、徹底しているわけです。

こうしたシカゴ的なものから見方からすると、ケインズ経済学というのは所詮、異分子なのです。したがってシカゴの極端な人はケインズ経済学を初めからソーシャリズム socialism だと思っていた。アメリカでソーシャリズムといったら相当な悪口なわけですね。ちなみにレオンシェフの Input Output Analysis 産業連関表もソーシャリズムだと言われてレオンシェフは相当ハーバードでいじめられて、かなり早い段階でニューヨーク・ユニバーシティに移ったという事もあります。そういう感じなのです。

話が少し戻りますが、ある時期、ある世代のアメリカの経済学者たちに熱狂的にケインズ経済学が受け入れられたのはやはりグレート・ディプレッション Great Depression の影響です。サミュエルソンもトービンもソローもみんな若い時にグレート・ディプレッションを経験して。これを何とかできないかということで経済学を志したと言われていた。政治でいえばルーズベルトのニューディールですね、これがアメリカの歴史の中でどういう役割を果たしているのか。もちろんある一部の人たちの中ではルーズベルトはいまだにヒーローだと思いますが、やはりアメリカの社会の中に根強くあるシカゴ的なベースというのがあって、これが経済学を規定してきたというふうに考えています。

マクロ経済学とミクロ経済学の区別

時間の都合もありますので、駆け足で、もう一つの大きな問題はですね、マクロ経済学とミクロ経済学の区別ということです。私たちが勉強していたころはサミュエルソンの考え方もあったわけですが、マクロとミクロの違いというのは自明だったのです。しかしながらこれが今では自明でなくなってきていると思います。マクロとミクロの違いというのが曖昧になってしまった。私に言わせれば事は頭の中で整理すれば簡単なものであり、明解な事であるにもかかわらず2つの経済学の区別が明瞭でなくなっている。

何を言っているのかかという、経済の中にはマクロの問題とミクロの問題があるのです。マクロの問題とはここでは国全体の話とさせていただきます。日本経済全体の問題。ミクロの問題とはいろいろな問題があって、何でもいいですよ。例えば最近のサーチ理論の話で言えば、本来は1物1価というのが成り立つはずなのに、例えばこの湯田温泉のあたりで同じペットボトルが、なぜ120円と140円で売られているか、全く同じペットボトルなのに、なぜ120円と140円というのが両立しているのかということを説明してみると。これは私のいうミクロ。それでいえば石油の値段がバレル何ドルか。これもミクロの問題です。

それから有名な論文として“Market for Lemon”というのがアカロフという経済学者によって書かれた。レモンというのはこの場合アメリカの俗語で中古車のボンコツ、質の悪い中古車。売る方は客を騙してでも高い値段で売ろうとする、買う方はなるべく騙されないようにして良い中古車を買おうとする、マーケットの均衡はどうなるか。これも私に言わせてみれば典型的なミクロ。ミクロの問題の場合には当然ですが関係した経済主体売り手と買い手、あるいは企業それから個人、その

戦略的な行動とかある種の最適化, optimizationとか、それを詳細に分析するのは当然だと思う。それが事の本質というか問題であるから。それに対して一国経済全体を分析するときには、個々の経済主体の motivation, あるいは戦略的な行動とかそういうものは、ほとんど分析する意味がなくなるとというのが私の基本的な主張です。

ところがシカゴ経済学というのは基本はやはりミクロなのです。人々の最適化、それをとことんいろいろなことを考える。現在流行のゲーム理論なんかも、ここに専門家がいらっしやるかもしれませんが、基本的にはそのようなものであるわけです。私にいわせてみると、それは役に立つとしてもミクロだ。マクロでは全く役に立たないと思っているわけです。

それからそもそもそういうミクロのいろいろな動機なんかを分析していくということ自体どういったらいいんでしょう、相対的なもの、つまりソーシャルのもの、医療保険のようなものがより大きな役割を果たすということはあるかもしれない。そういう大きな問題がある。

今のアメリカを中心とする経済学会：アセモグル批判

それから今日パネルを用意したのですが、それに基づいていちいち細かいことを説明させて頂くよりは、もうちょっと一般論をお話させて頂いたらいいかと思います。

今の経済学そのものがどんどん私から見るとちょっとおかしいんじゃないかと感じがしているのが、経済学のプロフェッションそのものが、ケインズのビューティーコンテストのようになってきているのではないかと。ケインズのビューティーコンテストというのはご存じの方も多かもしれませんが、株式市場なんかについてケイン

ズが指摘したもので、一言で言うと付和雷同ということですが、それぞれの人がこれが正しいとかいうことではなくて、他人の目を気にしながら付和雷同するということ。

私自身は50年くらい経済学をやっているわけですが、50年前でもアメリカの大先生たちというのは大変プライドを持っていて、自信をもっていたと思います。しかし、彼らは極めて謙虚だったというのが私の印象です。それに対して今のアメリカを中心とする経済学界の大先生というのがどんどんどんどん傲慢になっていってるんじゃないかというのが私の印象です(笑)。これは他の分野でもそういうことがあるようですね、歴史学とかそういう分野でも。それが至るところにある。

例えば専門が違う方はひょっとしたらご存じないかもしれませんが、アメリカの経済理論の世界で天皇のように言われている「アセモグル」Acemoglu という人がいます。もともとはトルコ系の人だと思いますが、アセモグルという人がいるのですが…。アセモグルをアメリカの学会で誰かがイントロデュース Introduce するときに、アセモグルを褒めるということで行ったんでしょうが、そうやって自分が彼のことを紹介している間にも、アセモグルのサイテーション citation というのでしょうか論文の。サイテーションが1分間に何個も挙げられていって、何百、何千というように1年間でなると。それをイントロデュースしている人は、場という事もあると思いますが、素晴らしいことだとアセモグルを褒め称える意味でそれを挙げているのですが、私はそれをかなり気持ち悪い現象だと思う。つまりアセモグルの論文を素晴らしいと私は個人的に思っていないということもあるんですけど、サミュエルソンでも誰でも昔そこまで一人の経済学者を褒め称えることはなかった、というのが私の感想です。

ある時ある研究会で、若い優秀な人の発言が印象に残っています。中国経済のことがその研究会で問題になっていて、その研究会はいわゆるインターディシプナリー-interdisciplinary で、経済学の専門家だけでなく政治学の人でしたが、「中国の政治というのは我々の国とは非常に違って、独裁的な面も確かにあって、しかし経済の方はそこそこ中国経済は成長している」と。そういう話をしたら、有能な若い経済学者がそれは違うと。アセモグルが「民主的でない国は成長できない」ということを証明していると、強い調子で言ったんです。

これは私にとっては変な既視感があつてですね、まさに今日初めてお話しした、それこそ高校時代にまで遡る、マルクス経済学の人たちが資本主義経済が崩壊することはマルクスによって証明されていると。それは若い時代に私が持った大きな疑問なのです。言葉は言葉だと言ってしまうとそれまでなのですが、私の中で証明というのは根強く数学の証明と結び付いていて、私どもが中学の時は3年間、ユークリッド幾何学を叩き込まれたのですが、そこで出会った証明というのは、およそ証明というものの典型であると思って生きてきたわけで、マルクスが資本主義経済の崩壊を証明したといったときの証明は、一体どういう意味での証明なのだと、いうのがですね、経済学を学ぶ動機にもなった。

さて、翻ってアセモグルが民主的でない国は経済成長ができないということを証明したというときは、これはクロスカントリーテストというんですが、いろいろな国のデータをクロスカントリーにリグレッションをやって、多分民主化の代理変数みたいなものを作って、そのダミーが効く効かないかみたいなそんなことをやったと思うのですが、私が疑問に思ったのは、若い有能な人が、そ

れほどナイーブなリグレーションで証明したということをご自分で強く言うそのある種のメンタリティーに私はびっくりしたんですね。つまり恐らくその人は、そのリグレーションはアセモグルがやったからそう言っているのではないか、というふうには私は思った。誰か日本人の X さんが同じリグレーションをやったときに、その人がそれほど強く、そのリグレーションの結果を信じるだろうか。そんなリグレーションは変数をちょっと変えれば結果はすぐ変わるくらいに誰でも思う。でも、その証明したとまで強い調子で言うというのはアセモグルという人の名前、権威によるのではないかと。そういう傾向がどんどんどんどん経済学者の中で強くなっているんじゃないか、というのが私の考えです。

ミクロとマクロの違い：バロー＝ベッカー批判

もう時間もないので、要するにミクロとマクロでは全然違うと。ミクロの問題、マクロの問題というのがあって、マクロの問題というのは大まかに言えば最後は歴史に繋がっていくんだと私は思っています。歴史に繋がるということは数学的な方法が全く役に立たないということではなくて、私自身、自分なりに使ったりしているんですけども、しかし、完全にクローズドした一つの数学的なモデルが作られるかというとなんかことは有り得ないというのが私の考えです。1部の理論家、ゲーム理論の人などと話していると例えばエコノトリミカという雑誌があって、エコノメトリック・ソサイエティ、それは素晴らしいことだということですが、私はなぜそんなナイーブなことが言えるのか信じられない。私の分野で最近のエコノトリミカの論文で、最近と言ってもここ20年ぐらいですが、とんでもない論文がいくつもあります。

例えばバロー＝ベッカー（Becker and Barro）という論文があって、バローというのは有名な、ベッカーというのはノーベル賞を取ったシカゴの先生です。私はベッカーに対しては、かなり強いプレジャディス prejudice 偏向をもっていると思っています。私自身の教わった恩師である宇沢（弘文）先生はシカゴの同僚で、フリードマンも酷いがベッカーはもっと酷いと盛んに言っていました。確かにベッカーはなんでも最適化 optimization, で、奥さんが自殺した途端にエコノミクス・オブ・スイサイド（Suicide: An Economic Approach）という論文を書いて JPE（Journal of Political Economy）に発表した。生きている時の効用と、自殺した時の効用を比較してどうのこうのと。

ノーベル賞をとったのですが、ベッカーがチャイルド・ベアリング childbearing とか、子育てなんかの経済学というのをだいたい前から簡単なモデルでやっていて、それは私はそれなりに意味があると思うんです。確かに子どもを産んだり育てたりする時、すべてではないにせよ経済的な側面があるに違いない。そこを整理するというのは経済学の役割として意味があると思う。したがってベッカーの昔の簡単なそういうモデルというのはそれなりに意味があると思うのですが、さてバロー＝ベッカーは何をやったかという、スタンダードな成長モデルの中で人口というのが役割を果たすのですが、人口を内生化して、ベッカーがやっていたような子どもを産んだり育てたりという効用の最適化を取り入れたんです。

どういうモデルになるか。子どもは育てているときにはそれなりにコストがかかる。確かに子育てをやってみれば大変だ。女性にとってはもっと大変だ。しかしやがて子どもは成長してくる。それを見て喜びを感じるとか、その他ユー

ティティリティUtilityを生む。コストを最初に払うと、将来ユーティリティが生まれるというのは経済学で何ということかというインベストメント investment です。インベストメントに一番影響を与える変数というのは、スタンダードな経済学で利子率です。

したがってバロー・ベッカーのを読んでみると、チャイルド child、子ども、人口に最も重要な影響を与える変数は利子率ということになる。まともな人ならそこで論文を放り出すべきだ。今、この日本で少子化、人口が減って大変だと大騒ぎしているわけですが、誰が利子率が大事だとか、日銀が悪いだとかいうんですか。ところが経済学の世界で一直線で研究しているところこういう話になっちゃう。これは私に言わせてみれば、経済の現実というのを全く見ないで、「経済学」学というべき、それをやっている。こんな「経済学」学が世の中にくらでもあって、それを有難いと思うのかというそういう感じがするのですが、若い経済学者と話していると、私が今言ったようなことは発想として全然ないんですね。Econometrica のサイテーション citation がすばらしくて、と。こんなようなことで経済学は何か変な時代に入っちゃっているなと思っています。

最後に重要なこと

そこで最後に重要なことは経済学の役回りは無くなっていないということです。今でも日本の経済社会を見ると、格差でも何でも、兎に角、経済の問題というのは、日本だけではない世界中で極めて大きな問題としてあるわけで解決を求められているわけです。ところが残念ながら、経済のプロフェッション全体として、世の中が求めている問題に向かい合っているかというところがそうならないんじゃないか。例えば医学部の先生が世界中で

健康の一般理論の数学モデルなんかを作って、役に立たないことをやっていたとしたら異様としか言いようがないのですが、何か経済学の世界ではそのような状況になっちゃっているんじゃないかという感じがするということです。

私はケインズの経済学の核というのは「有効需要の原理」ということで、先ほどもお話ししました。マクロを考えるときには、個々の経済主体の動機そういう詳細を追ってそれを相似拡大するという方法論は意味をなさない。むしろ積極的にミクロの詳細を捨て去る；統計物理の方法こそが有用な方法論だということこういう主張です。その点を加藤先生がやってくくださるんですね。そこで、時間が超過しちゃったんですが、バトンタッチをさせて頂きたいと思います。

司会進行

ありがとうございます。この後すぐ、加藤先生にやっていただきますが、その前に少し配布資料の説明した方がいいと思います。

- ・吉川洋パワーポイント「マクロ経済学の再構築—ケインズとシュンペーター」
- ・加藤真也パワーポイント「吉川洋先生『マクロ経済学の再構築—ケインズとシュンペーター』研究報告に対するコメントと質問」
- ・→別稿参照

以下の配布資料は、今のこの研究会 I のご講演の内容とも関連するところです。

- ・吉川洋 (2000)『現代経済学』創文社。より抜粋、pp.iii-iv, pp.54-55, pp.320-321.
- ・吉川洋 (2020)「リーダー本棚 ロマン主義に動かされる」『日本経済新聞』2020年4月4日.
- ・吉川洋 (2013b)「過去40年間のマクロ経済学は間違った路線だった」『エコノミスト』2013年9月10日号.

- ・吉川洋（2013a）「いま経済学を学ぶ意義『目の前の現実を直視して答えを出す』『エコノミスト』2013年4月2日号.
- ・吉川洋（2020）「リーダー本棚 立正大学学長 吉川洋氏『ロマン主義に動かされる』『日本経済新聞』2020年4月4日（土曜日）.
- ・吉川洋・岡崎哲二編（1990）『経済理論への歴史的パースペクティブ』東京大学出版会. pp.1, pp.4-5.
- ・『日本経済新聞』2023年10月21日（土曜日）「文化勲章・功労者 喜びと抱負」

なお配布資料としなかった文献で司会進行の方向で言及した文献について、さらに下記、司会進行注記に付す。但し、ご講演中のシカゴ学派らの文献は、相応に批判的に扱われていることもあり、有名ですぐに文献が検索できることもあり、敢えて示さない。¹⁾

司会進行注記

司会進行注記として、上記の配布資料に言及しておこう。既述のように、吉川洋先生のご講演内容とも関連しており、講演会においても簡単に言及したことである。

まず上記、吉川（2020）は、本研究会の最初の「自己紹介と経済学の変容」と題した部分につながり、大学生になったばかりのとき、マルクスの

『資本論』、宇野弘蔵の『経済原論』を読んだが、ケインズの一般理論へ転換し、宇沢弘文のゼミに大学2年の秋から入れてもらったと書かれている。座右の書としてケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』を挙げ、「その他愛読書など」として、「『経済原論』（宇野弘蔵著、岩波文庫）」（日経新聞の書き方のまま）、幼少期や中学・高校時代に愛読したことが書かれている。なおこの吉川（2020）では、「シュンペーターのいうイノベーターはニーチェが提示したディオニソス的な存在だ」と後年気付いたことが書かれており、山口大学での教育講演会・研究会とも関連して、興味深い。

吉川洋（2013a）は、事前に浜島ゼミでは下記の吉川（2022）・吉川他（2011）等をテキストに用いて、概要を報告させ、期待以上に内容の理解を示したと思っているが、主流派の経済学、マクロ経済学のミクロ的基礎づけの理論にそれほど問題があるのであれば、私たち学生がミクロ・マクロ経済学を学ぶ意義はどこにあるのでしょうか？という質問も出たために、主流派、ルーカスの合理的期待理論、「リフレ派」等を批判しつつも、「いま経済学を学ぶ意義」を語っている本稿を参考に挙げたものである。経済学は「少子高齢化に伴う社会保障の持続性など、さまざまな課題」に「現実の問題に答えを出さなければならない」と

1) とはいえアセモグルに関しては、案外、知られていないようなので、司会進行役として敢えて付言しておきたい。

例えば、アセモグル（&ロビンソン2012-2016）では、ルイスモデルの二重経済論に対して興味深い批判がされている。すなわちルイスの農村＝都市間の二重経済というのは、実は西欧植民地主義により現地人の安価な労働力のプールを作るためのものだったという。二重経済が終わったのは、無制限労働供給の枯渇により実質賃金が限界生産力に等しくなるというよりも、現地の黒人たちが政権に抗議し立ち上がったからだと主張する（同pp.38-56）。かつての新従属理論家ですらこれほど端的な表明はしていなかったのではないか。アメリカ経済学会・新古典派の帝王らしからぬ見解と思われる。またブラジル労働党政権に関しては、労働組合ばかりでなくNGOや地域住民も巻き込んだから、民主化と経済成長に成功したと論じている（同pp.318-321）。ブラジル労働党に対する偏りがあるようには思われるが、アセモグルがアメリカの若手で有名な経済学者の間を席巻するというのは、こういう社会民主主義的な主張ゆえではないかという余談も付言しておきたい。

なお同書には、アカロフ、ベッカー、他、ノーベル経済学賞受賞者たちが賛辞を送っている（とはいえ、左派と目されるステイグリッツやクルーグマンの賛辞は見当たらないが）。

・アセモグル&ロビンソン（2012-2016）『国家はなぜ衰退するか—権力・繁栄・貧困の起源 下』ハヤカワ文庫。原書名は省略する。

本稿脱稿後の2024年秋、D. Acemoglu, J. Robinson そして S. Johnsonの3氏はノーベル経済学賞を受賞した。

「自戒を込め」反省すべきだとしている。もちろん山大経済学部の教育講演会、そして研究会のご講演でも取り上げられた課題・問題である。「最後に重要なことは経済学の役回り」と言われたとおり。

吉川洋 (2013b) は、本学研究会でも言及された、ルーカス批判が端的に書かれている。主流派のマクロ経済学は、「代表的」なミクロの経済主体の相似拡大としてマクロ経済のミクロ的基礎づけとしているが、間違えた路線だったと批判している。当時の日銀が、人々の「期待インフレ」に働きかけようとしていたが、これはルーカスの合理的期待形成理論と関係している。だが期待インフレと言っても、例えば鉄鋼会社、寿司店経営者・主婦などそれぞれ異なり、全体の期待インフレなど定義できないと批判している。

『日本経済新聞』2023年10月21日(土)では、本学教育講演会・研究会の半月ほど前、日本国政府が2023年度の「文化功労者」に吉川洋氏を選んだことが書かれてある。記事には「デフレの原因を貨幣供給の不足に求める一派と対立し、真因を賃金低下に求める書を世に問うた」(p.42)と紹介されているが、より正しくは、いわゆるリフレ派への批判であり、原因を名目賃金ばかりでなく実質賃金までも低下していることに求めたものであった(吉川2013)。なお同年の文化勲章授賞の一人は岩井克人東大名誉教授であった。

吉川・岡崎(1990)は「経済現象は個性的な歴史事象の集合体に他ならない」(pp.1)「歴史的なプロセスを対象とする経済学」(pp.1)「近代経済学の『理論』は前述のように歴史的パースペ

クティブをほとんど完全に喪失している」(pp.4)と手厳しい、完全に共著であるとされていた。ご講演中のマクロは最終的に歴史に繋がってくるという言葉とも呼応している。

吉川(2000)は、のちに経済物理学として結実される場所であるが、産業構造論の方向性もありうるのではないかと思われた。すなわち「ルーカスのモデル、ニュー・ケインジアンモデル、RBC、内生的成長理論、いずれをとってもそこには『産業構造』という視覚はない」(pp.321)。マクロ経済—産業—企業・ミクロの三層構造が示され、産業連関の方が産業組織論よりもはるかに重要だとされている(pp.55)。あとがきでも触れよう。

- ・青木正直, 青山秀明, 有賀裕二, 吉川洋(監修) (2011) 『50のキーワードで読み解く経済学教室—社会経済物理学とは何か?—』東京図書株式会社.
- ・吉川洋(2013) 『デフレーション—“日本の慢性病”の全貌を解明する』日本経済新聞出版社.
- ・吉川洋(2022) 『マクロ経済学の再構築—ケインズとシュンペーター』岩波書店.

* 以上で、研究会Iのメインである加藤真也氏の「解題 吉川経済物理学(仮題)」となる所、ご本人の希望により、別稿に替える。加藤真也・鳴海孝之(2024)「確率的マクロモデルにおける生産性の分布の導出過程[1]」である。それから「研究会Iの②加藤氏の質問と吉川氏の回答」へと続いていく。